

9月23日「有機農業の原点を語る世代間連続セミナー第0回」シネマ&トークの夕べ

映画「水俣の甘夏」 & 鼎談「水俣～有機農業～福島」－開催の趣旨

ぼくが有機農業に関心をもち、活動を始めてから40年以上が過ぎた。なぜ有機農業や環境問題に関心を持ったのか、その原点はやはり「水俣」にたどり着く。

水俣病の公式確認から今年で60年がたつ。改めて水俣病を考える、そんな催しがいたるところで開かれている。それだけ水俣病問題は日本の現代史に大きな影響を与えたのだ。

そして、水銀汚染によって海を奪われた漁師が山にあがり、農薬の使用を減らしながら甘夏の産直事業を始めた。そこにはどんな試行錯誤があったのか。水俣は、明らかに日本の有機農業運動の原点の一つであった。

水俣病の原因企業であるチッソ(株) (旧新日本窒素肥料株式会社) という会社は、その名が示す通り化学肥料を作り出した企業であると同時に、塩化ビニール生産を主力とする日本最大の化学工業会社であった。日本の農業を化学肥料と農薬の多投型に変えた象徴的企業であり、経済復興を牽引する国策企業でもあった。特に水俣病の原因となった水銀は、チッソ(株)が作り出したビニールを柔軟にする「可塑剤」の原料となるアセドアルデヒトの生産工程から発生したものである。農業でのビニールハウスやビニール袋などの家庭ユースを可能にしたのは、その「可塑剤」のおかげであり、日本の高度経済成長と暮らしの豊かさは「公害」という負の部分と引き換えに可能となったと言っても過言ではない。

そして2011年3月11日の東日本大震災に誘発された福島第一原発事故による放射能汚染が起こる。水俣病を知り、あるいは水俣病事件に深くかかわってきた人々の多くは、福島原発事故を招いた本質、そして被害者(地域)の行く末に対し、水俣に代表される公害問題を生み出した半世紀前の日本の姿と、変わらぬ問題があることを強く感じている。

水俣病とはそもそも何だったのか、日本で有機農業が始まった原点として、なぜ水俣なのか。柳田耕一は水俣に移り住み水俣病患者支援組織を作り、水銀汚染によって海を奪われた漁師が山にあがり作る甘夏の産直事業を始めた。同じく水俣病問題に触発され有機農業に長年取り組みながら福島原発事故で被害を受けた魚住道郎は、腐植とバクテリアの多い有機の土ほどセシウムをつかんで離さず、野菜への移行が少ないことを証明して見せた。その両者を招き、当事者として水俣、有機農業、そして福島を語ってもらう。

ところで、ぼくの父は水俣病の原因となったアセドアルデヒト生産工程を構築したときのチッソ(株)の技術部長であった。その後水俣工場長、支社長、本社専務となり、裁判にも証人として立たされた。その意味では、水俣病患者支援組織作りや裁判闘争のど真ん中にいた柳田、魚住氏と加害者側の環境の中にいた私、有機農業に関わり、かつ対極にあったもの同士の初めての語り合いになる。この鼎談を通じて、何よりも次の世代の方々に有機農業の原点の一つでもある水俣病問題をきちんと伝えていければと思う。どうぞご参加ください。

一般社団法人フードトラストプロジェクト
代表理事 徳江倫明